燦光

７６８号

2026年９・10月

日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071
東京都大田区田園調布
3−34−18
電話　03-3721-2811
FAX　03-3721-2814
https://den-church.jp/

人間に従うよりも、神に

使徒言行録　五章二七〜三二節

牧師　山北宣久

主に従う者たちに対する圧迫、教会に対する迫害、そうした悪しき力が増していく理由が「ねたみに燃えて」という言葉で記されているのを教団聖書日課で耳にした。

嫉妬心が圧迫、迫害となってあらわれ出る、よくあることだ。諺にもある。「敵の伏兵よりも、友人の嫉みに用心せよ」。

ある思想家は言う。「憎しみのエネルギーとか、嫉妬のエネルギーとかが存在するわけではない。それは、愛のエネルギーが病気にかかっている状態なのである。」

愛のエネルギーが病んだ状態、それが嫉みだというのだが、どこで病気になるのであろうか。それは脇目を振りすぎることからであろうと思われる。神と自分という関係よりも、他者との比較において自分を位置づけようとするところから嫉みは生ずるのではないか。「脇見運転、事故のもと」。これは霊的世界においても、その通りなのであろう。

大祭司とその仲間のサドカイ派の人々が嫉みに燃えたのは、「民衆は使徒たちを称賛し、多くの男女が主を信じ、その数はますます増えていった」からだと一三・一四節に書かれてある。他から嫉妬されるほど、主の群れが質的充実と世間の尊敬を集めていたとは、大したものだと言える。

しかし、共通の敵を持つと人間は緊密になるもので、反使徒の動きはやがて議会を巻き込み、国家権力からの迫害に発展していく。

しかし、そうした抵抗が強くなると反って主の福音がはっきりともたらされていくこととなり、今日の段落の最後にある如く、「わたしたちはこの事実の証人である」と信徒としての主体性を明確にし、キリスト者の迫力を増していくこととなった。

そして、その証しは、二九節にある「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」という自覚、確信、告白であったのである。

「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」との言葉に堅く留まっている時、教会は苦しくても生き生きとしている。逆に、「神に従うよりは、人間に従うべきである」との思いにとらわれる時、教会、そしてキリスト者は恵まれていても弱々しくある。これは、昔も今も変わることはない。

戦いを避け、困難を回避し、まあ適当にやっていこうとする誘惑に負け弱体化する中、少数の人々が「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません」との信仰と証しに立って戦っていってくれた故に信仰の純粋さが保たれ、目覚めをあたえられたということが、教会の、また教団の歴史の中にあまた見てとれる。

殉教者たちの抵抗や戦いを見聞きし圧倒され、反って尻込みし「自分には、とてもそんな戦いはできない。人間なんて弱いものだ」などと自分を甘やかし、正当化してはいけない。

多くの信仰の先達の戦いがあったからこそ、教会が立ち続けられ、信仰が継承され、私たちがこうして礼拝を捧げ、交わりを与えられていることを思うと、感謝をささげざるを得ない。

であるなら、自分たちなりに人間中心主義と戦い、神に従う道を強めねばならない。

私たちが主の証人として立つ時、「また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しする」と、三二節に記して、この段落を締め括っている。

イエスは主なりとの証しをなす時、聖霊そのものが私たちの証しを裏打ちし強める。この体験を重ねていきたいものだ。

（二〇二六年一〇月一一日　夕拝説教）